

「井伏鱒二著作年表稿」手控え 3

前田 貞 昭

はじめに

本手控えは、第一に、既発表「井伏鱒二著作年表稿」で対象とした期間の内で新たに初出を確認できたものについて報告すること、第二に、誤脱・記述の不正確を補綴することの二つを目的としたものである。なお、対象期間は、既発表「井伏鱒二著作年表稿」で対象とした昭和10年～20年と、昭和9年1月～6月である。

本手控え作成に際しては、林眞氏、山内祥史氏、奥出健氏、館上敬一氏、相撲博物館から御教示や資料を頂戴した。今回のものについては、とりわけ奥出健氏の御教示によるところが多い。また、資料の入手・確認に当たっては国立国会図書館、日本近代文学館、大阪府立中之島図書館、相撲博物館、京都府立総合資料館を利用させていただき、兵庫教育大学附属図書館情報サービス係のご協力を賜った。記して感謝申し上げる。

なお、凡例は本誌に掲載した「井伏鱒二著作年表稿（昭和7～8年）」の凡例と同じだが、ここに新たに掲出するものについては、筑摩書房増補版『井伏鱒二全集』以外の再録書を解題のところに記しておいた。

下記以外にも、まだ多くの井伏文があろうかと想像している。御教示を戴ければ、それをも追加公表してゆきたい。どのような些細なことでも、〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学言語系教育講座 前田貞昭宛てお知らせ下さるようお願い申し上げます。

昭和9年(1934)

噂ばなし(一)

ジイド全集月報 ラ・フルミ・3号・pp.1～2・<5月10日(5月5日)>・建設社
(坂上真一郎)

「井伏鱒二著作年表稿(昭和9年1月～6月)」(『兵庫教育大学研究紀要』12巻2分冊・1992年2月)では再録書なしと記述したが、「小林秀雄」の項のみ『論集・小林秀雄』第1集(麦書房・1966年7月30日)に再録されているので訂正する。

昭和10年(1935)

瀬戸内海にて

海・41号(正月号)・pp.18～19・大阪商船株式会社・今道潤三・非売品

本文末尾に「(十一月二十九日)」とある。『山川草木』(雄風館書房・昭和12年9月27日)に初収録。中村由信の写真集『瀬戸うちの人びと』(社会思想社・1965年10月30日)の「瀬戸うち」の内に収録。*「私は海上生活をした経験もなく、海のことや航海のことについては自分で語る思ひ出もない。昨年の夏、石油発動船を一艘やとひ入れ瀬戸内海の島めぐりをして見たが、べつだん珍しい話もなかった。」「私たちは鞆ノ津から出航して、田島、向島、因ノ島、弓削島、走島、白石島、神ノ島といふ順序に、この七つの島を一週間で巡遊した。」それらの島の様子を記す。なお掲載誌『海』は大阪商船のPR雑誌で、本号の奥付横には印刷部数3万部と記されている。『海』13巻4号(通巻143号<廃刊号>昭和18年8月1日)の「海」編輯係名義「謹告」によれば、大正13年7月25日から発行され、上記のように昭和18年8月に廃刊。

田舎の夜遊び風景=ユーモア小説=

信濃毎日新聞朝刊・18901号・8面・1月1日

奥出健氏のご教示による。本文末尾に「(完)」とある。パラルピ。*ある夜、二人で酒を飲んでいた左門と拓路は、夜遊びの相談をする。左門は拓路を連れて、村の共同風呂まで行き、入浴していた男から、村の若い衆や娘の今晚の様子を聞き出す。情報を仕入れた二人は、男のことばに従って夜這いに出向くが、その夜は、どこでも不首尾に終わってしまったのである。

大人叶

築地座・27号・pp.5~6・2月22日(2月20日)・友田恭助・10銭

「井伏鱒二著作年表稿(昭和10年)」(『兵庫教育大学近代文学雑誌』3号・1992年1月)では、現物未確認のまま掲出したが、初出現物を確認したので再掲する。奥付には編輯兼発行人として友田恭助の名が掲げられているが、発行所の名はない。本文末尾に「(二月十五日)」とある。*「以前から私はあまり芝居見物に行かないが、友田君の舞台だけはたいてい欠かさないで見た。それは見慣れた舞台だから見たいといふ理由によるものであつて、見落とすと後になつていつも物足りない。私は友田ファンの一人であつて半畳など入れたくないのである。」「私」は、脚本を読むときなどいつしか友田君の舞台を想像しながら読んでいる。しかし、「私」の予想通りに演技されると嬉しくない。「私」の空想を出し抜いた演技を友田君が見せてくれるときこそ最も楽しい。「いづれにしても友田君の劇団は、なるべく分裂しないやうにファンの一人としてそれを切望する次第である。」

<無題>=装幀についての諸家意向= *アンケート回答

書窓・2巻1号(通巻7号)・p.28・10月10日(10月6日)・志茂太郎・恩知孝四郎(志茂太郎)・50銭

アンケート項目は「装幀者側へ」として「1 御作装幀にて案、仕上について御満足なるもの/2 装幀についてかくあるべし、かくありたしの御意見」、「著者側へ」として「1 御著の装本についての色の御好み/2 既刊御自著中、装

頓のお気に入った本」とある。*「1 特に好きな色はありません。」以上井伏回答全文。なお、中川一政が「1 なかなか気に入った作無之候へ共比較的のもの申上候」として挙げる中に、「井伏鱒二『川』」がある。

昭和11年(1936)

<無題>

『晩年』・帯・砂子屋書房(山崎剛平)・6月25日(6月20日)・2円

太宰治著『晩年』の帯。「(左記は五年のむかし、昭和七年初秋、弊依破帽、蓬髪花顔の一大学生に与へし、世界的なる無染の作家、井伏鱒二氏の手簡である。)」と紹介がある。本文末尾に「九月十五日」の日付がある。*太宰の「思ひ出」を賞賛するとともに、学校への出席と小説を書くこととを並行して行えという忠言が記されている、井伏の太宰治宛書簡。

<無題> = 文壇縁台俳句 =

東京日日新聞朝刊・21552号・13面・7月29日

奥出健氏のご教示による。白井喬二、今井邦子の句とともに掲載。*「もそつと、自棄になれ稲妻こぼす雲の足」

御隠居さん = 短篇 =

信濃毎日新聞朝刊・19524号・6面・9月20日

奥出健氏のご教示による。本文末尾に「(完)」とある。パラルビ。*「人見さんのお宅の十四になる男の子が家出をした。府立中学一年生の子供である。夏休みの間に一学期の通信簿をなくなして、それで先生に咎められるのを案じた結果にちがひない。」「人見さんのお宅では御主人が地方に出張中でお婆さんと年寄の女中だけである(。)」家出二日目になっても帰宅しないのを心配した女中は、警察によって「若手の巡査」から効験のありそうな呪いを教えてもらい、御隠居さんと相談して早速取りかかろうとしていたところへ、男の子が帰って来た。御隠居はその日の夕刊に「女学校一年生の子供が家出をしたといふ記事」を見て、その呪いの方法を教えてやろうと思う。

うぶ湯

大阪毎日新聞臨時夕刊・19217号・7面・10月19日(10月18日)

奥出健氏のご教示による。挿画・富永清太郎。本文末尾に「(終)」とある。パラルビ。*「赤心堂病院は産婦人科専門の大資本の病院である。」「せんだつて満月の夜、月の出の前の時刻の二十分間に第三病棟には合計十二組のお産があった。看護婦たちが大童になつて立ち働いたが偶然とんでもない間違ひが起つた。」「生湯をつかふ浴槽で木の札が首からはづれ」た二人の赤ん坊の区別がつかなくなつてしまったのである。赤ん坊の父親である、「若手の会社員」と「××駅の

「事務員」とは大慌てである。

上京直後＝赤毛布縮尻時代＝

文芸通信・4巻11号（11月号）・pp. 18～20・11月1日（10月10日）・文芸春秋社・菊池武憲・15銭

「井伏鱒二著作年表稿（昭和11年）」（『兵庫教育大学研究紀要』11巻2分冊・1991年2月）には、現物未確認のまま掲出したが、復刻版を見ることができたので再掲しておく。

昭和12年（1937）

メンタルテスト＝ユーモア小説＝

満洲日日新聞朝刊付録其の二・11052号・4面・1月1日

奥出健氏のご教示による。「『井伏鱒二著作年表稿』手控え1」（『兵庫教育大学近代文学雑誌』2号・1991年1月20日）には、『北国新聞』朝刊・15804号（昭和12年1月5日）掲載のものを掲げたが、こちらの掲載の方が早い。

二・二六回想－一年後の“その日”を迎へ【上】－＝学芸＝

満洲日日新聞夕刊・11107号・4面・2月25日（24日）

奥出健氏のご教示による。翌日に続載。「井伏鱒二著作年表稿（昭和12年）」（『兵庫教育大学研究紀要』10巻2分冊・1992年2月）には、「浅春随筆」（『信濃毎日新聞』朝刊・19676号・昭和12年2月21日）の標題で発表されたものを掲げたが、同内容のものが、上記の標題で掲載されている。内容及び再録書等に関しては、既に掲出した「浅春随筆」の項を参照。

二・二六回想－一年後の“その日”を迎へ【下】－＝学芸＝

満洲日日新聞夕刊・11108号・4面・2月26日（25日）

青い鳥＝短篇・学芸＝

北海タイムス朝刊・16493号・10面・3月13日

奥出健氏のご教示による。「井伏鱒二著作年表稿（昭和12年）」（『兵庫教育大学研究紀要』10巻2分冊・1992年2月）には『信濃毎日新聞』朝刊・19731号（昭和12年4月18日）掲載のものを掲げたが、こちらの掲載の方が早い。内容及び再録書等に関しては、『信濃毎日新聞』掲載の項を参照。なお、既に指摘しているように『ホーム・ライン』4巻9号（昭和12年7月15日）にも掲載されている。

昭和13年（1938）

直木賞受賞者井伏鱒二氏と一問一答（上）

信濃毎日新聞朝刊・20040号・6面・2月23日

奥出健氏のご教示による。翌日に続載。23日掲載分の最後に、訪問記者と思われる「（篠原文雄）」の名前が掲げられている。＊井伏との一問一答が始まる前に、「純文学の雄、井伏鱒二氏が直木賞を獲得した。さきに文芸懇話会賞をもらった室生犀星、横光利一（、）尾崎士郎など、同じやうに、井伏氏の受賞は直木賞の名義にこだはずに、事実上の文芸春秋社賞の選に入ったと解すべきが妥当であらう。」といった前書きがある。一問一答の内容は、受賞の反響や、受賞作「ジョン万次郎漂流記」に関するものが中心である。井伏は、格別に漂流文学に関心を持っているのではないこと、平野零児の知り合いの河出書房の勧めで書いたこと、材料も平野から提供してもらったことを語り、「ジョン万次郎漂流記」に関しては、「この一代記は『ジョン万』自身の古風な観察にもとづき、現代の観点から過去を批評しながら叙述したと信じてゐる」と述べている。直木賞が大衆文学を賞の対象にしていることに関して、記者も何度か尋ねているが、井伏は、「私の作品は直木賞を目当てに書いた訳ではなく、私の文学する態度は昔も今も変わりがない。これからの作家の生活は苦しくなる一方だが、私の気持は事変前も事変後も何等変つてゐない。作家が貧窮してゆく事は覚悟の上である。今後も今までの辿つて来た通り私の文学の世界を謙虚に歩むばかりだ。私にはこれ以上の言葉がない」と述べている。

直木賞受賞者井伏鱒二氏と一問一答（下）

信濃毎日新聞朝刊・20041号・4面・2月23日

子供と故郷＝作家の感想集（4）＝

信濃毎日新聞朝刊・20090号・6面・4月15日

奥出健氏のご教示による。パラルピ。「故郷のない子」と改題して『ホームグラフ』21号（昭和13年7月1日）に再録。内容に関しては「故郷のない子」の項（「『井伏鱒二著作年表稿』手控え1」、『兵庫教育大学近代文学雑誌』2号・1991年1月）を参照。

昭和14年（1939）

山村風物記＝文芸＝

一橋新聞・280号・3面・1月1日

山内祥史氏の御教示による。本文末尾に「（十二月二十一日）」とある。パラルピ。＊「先日、東北地方の田舎へ旅行に出るつもりで、その地方の農村見物記を書く約束をしてゐたが、身辺の整理がつかなくてその旅行、止すことにした。」旅行にも行かず、見物記も書かないで、結局二重に嘘をついたことになる。農村の見物記というようなものには、「どれだけ正確に書きどれだけ雰囲気を実に

感じて書くかといふことが問題だが、私ごときはそれほどの感受性に欠けている。」
「冷害地方の被害者にとつて一つの慰めになる」というので、「いつか山形県の冷害地方視察に行ったとき私は田舎の顔役の説明をきき、その人の云ふ通りのことを自分の意見として新聞に書いた。」「ところが、今年の十月ころ私は甲州の山のなかの宿に行き、その宿と懇意の人から『これこれかういふこと』は絶対に書かないやうにしてくれと頼まれた。」「甲州のその山の宿に、私の友人が五日ばかり泊まって小説を書いていた。私は友人を訪ねるためその山の宿へ出かけたが、久しぶりに見た友人はたいへん気難しい顔をして、実に腹が立つと腹が立つと云つてゐた。」その友人の話では、「山麓から役人がやつて来て」、友人の職業を確かめた上、県知事夫人がその山の宿にピクニックに行くのだが、そのことを決して書いてはいけないと通達したとう。この非常時に、村の役人を動員するのは贅沢だし、知事ではない知事の家族のために自分の文章のことでまで調べ上げるのは余計なことだ、と友人は腹を立てたのである。

<無題> = 片雲録 =

報知新聞朝刊・22620号・1面・12月8日

奥出健氏のご教示による。本文末尾に「(筆者・小説「多基古村」作者)」とある。
*「この頃僕は鮎の友釣をはじめたがこんなに面白いものはない。かつてハヤなどを釣つて喜んでゐた自分が馬鹿らしくなる。釣をしてゐる時は小説のことなどはすっかり忘れてしまつてゐるから妙だ。僕は来年まで健康で居りたいと希つてゐる。それは釣を楽しみたいからである。」以上全文。

昭和15年(1940)

竹縄 = 随筆 =

相撲・5巻1号(新年号)・1月5日(昭和14年12月31日)・pp.15~17・大日本相撲協会
・彦山光三・80銭

館上敬一氏及び撲博物館から複写を頂いたので掲載する。『風俗』(モダン日本社・昭和15年6月17日)に初収録。のち、『風貌姿勢』井伏鱒二随筆全集3(春陽堂書店・昭和17年2月18日)、『風貌姿勢』(三島書店・昭和21年12月20日)に収録。
*常陸嶽、すなわち現在の年寄・竹縄は、藤田利一とって、「私」の中学の一級下の後輩であった。その思い出を記す。

昭和17年(1942)

南方の文化建設を語る座談会【1】 - 日本文化の展開・民族感情を把握せよ - = 文化 = *
座談会

読売報知新聞・23547号・4面・8月5日

奥出健氏のご教示による。8月8日まで4回連載。出席者として、伊知地進・榊山潤・井伏鱒二・中島健蔵・平野零児・里村欣三の名前が掲げられ、次いで本社側として「岩崎昭南支局長・小坂・藤尾・山野辺各記者」の名前が紹介されている。リードに、「南方の建設工作はいま第二段階に入つてゐる、長年に亘る欧米の搾取と圧迫から離脱した南方諸民族はいま日本を中心とする“アジア人のアジア建設”に雄々しくも起ち上つたのである。欧米的なもの、一切を追放してこの広大な南方共栄圏に新しい日本文化の根を植ゑつけなければならない、そしてその時期は既に來てゐる。“南方の文化を如何に再建するか”-この問題につき本社昭南支局では現地座談会を開き軍囑託や〇〇班員として南方文化工作の第一線に挺身する作家、評論家諸氏から尊い体験に基く経綸と抱負を聞くことができた。」とある。*記録されている井伏の発言は二度だけである。その一つは「文化工作も勿論必要だがそれよりもまづ南方の民族に働く習慣をつけてやる必要があるだと痛感してゐる。」という趣旨の発言であり、残る一つは、「現地だけの日本語、片仮名で日本色を出せばいいんだ」という日本語教育に関する発言である。どの出席者の発言も、文化的優位に立つ占領者が教化・教育することを正しいとする価値軸に立ったものである。

南方文化の建設を語る座談会【2】-勤労精神の喪失・日本文化浸透の方策- =文化=
読売報知新聞・23548号・4面・8月6日

南方文化の建設を語る座談会【3】-現地だけの日本語・片仮名を普及せしめる- =文化=
読売報知新聞・23549号・4面・8月7日

南方文化の建設を語る座談会【完】-正しい日本を・民族の中堅の紹介- =文化=
読売報知新聞・23550号・4面・8月8日

マレーの文化と文学①-性急な日本化は駄目・欲しい、雑居民育成の統一原理- =本社主催
在昭南の文化人座談会 = *座談会
西日本新聞・87号・3面・11月5日

奥出健氏のご教示による。11月9日まで4回連載。但し、11月6日は休載。出席者、井伏鱒二・大江賢治・海音寺潮五郎・中島健蔵・荒木十三郎・北川冬彦・神保光太郎。西日本新聞社側として柴田記者の名前が掲げられている。リードに「大東亜戦争勃発一周年を前にして本社昭南総局では左記文化人の参集を求め座談会を開催し、マレー文化と文学について語つて貰つた、参集の諸氏は詩人として、批評家として、或は作家として今次大東亜戦争に参加し、砲煙の真只中において宣撫工作、宣伝工作に従事して戦場において文化人としての重要使命を果し、なほ現にマレー文化建設に血みどろになつて挺身してゐる」とある。*マレー半島・シンガポールの多様な民族の文化や生活様態についての話題が中心であるが、最終回で結論的なものを求められた井伏は、「いま南方には日本の文学は持つてこられない、若し純文学を持つてきたら、理解されないといふ戦火の試練を受ける

と思ふ現地の住民にはね……純文学を目標にすれば僕は實際的のことを云つてゐるが、此処に住む日本人を相手にすべきである、南方のものの文化はない、何がそんならあるか、クアラルンプールの博物館に行つて御覧なさい、明朝後期あたりの皿があるだけである、あと何にもいゝものはない、いま南方では音楽などは発達するだらうが、文学の範囲内では現在のところそれは絶望だと僕は思つてゐる」と語っている。

マレーの文化と文学②－音楽を持たぬマレー・日本人の良さを理解する華僑－＝本社主催
在昭南の文化人座談会＝

西日本新聞・89号・3面・11月7日

マレーの文化と文学③－来たれ一流の内地人・優良な現地の教員を養成せよ－＝本社主催
在昭南の文化人座談会＝

西日本新聞・90号・3面・11月8日

マレーの文化と文学④－南方独自の文学なし・期待される日本文学の新生面－＝本社主催
在昭南の文化人座談会＝

西日本新聞・91号・3面・11月9日

三つのともしび－伏見稲荷神社に参拝して－＝神々に祈る③＝

東京日日新聞夕刊・23873号・1面・12月23日（12月22日）

奥出健氏のご教示による。挿画・三輪晃勢。『セレベス新聞』朝刊・43号（昭和18年1月30日）にも掲載。*「八時ごろ雨が止みさうになつたので電車に乗り、そして伏見稲荷駅に下車すると稲荷山の上に少し青空が見えてゐた。」「私の祈願の内容は、たぶん他の人のお祈りの内容と同じだと思ふ。かつて私は昭南神社の社殿でお祈りしたときにも、そのお祈りの内容は（若し言葉に現せば）今度のと同様に『国内和合、増産、敵国降伏』のこの三つの言葉に圧縮され得るのである。」「私は社務所を出てから神前でおはらひを受け、そして無数に立ち並ぶ丹塗りの鳥居の下を通りぬけて奥社の前に出た。傍らに文学碑が建つてゐた。『ぬば玉のくらき闇路にまよふなりわれにかさなむ三つのともしび』と刻んである。後醍醐天皇の御製である。吉野へ急遽行幸され給ふとき、ここでお詠みになつたと言ひ伝へである。世が乱れ国運急を上げてゐた際に『三つのともしび』すなはちこの神社の三祭神を偲ばせ給ひ叡慮あそばされての御製と拝察し奉る。」

昭和18年（1943）

国運照らす三つの灯び－伏見稲荷神社に参拝して－＝神々に祈る（九）＝

セレベス新聞朝刊・43号・1面・1月30日

奥出健氏のご教示による。『セレベス新聞』はメナド発行のものと、マカッサル

発行のものがあるが、掲出しているのはマカッサル発行のもので、『セレベス新聞』という題字の下に「マカッサル市・セレベス新聞社」とある。『東京日日新聞』夕刊・23873号（昭和17年12月23日）に初出。

昭和19年（1944）

銭湯の策＝銃後に恒心あり・敵前生活の断想から＝

毎日新聞朝刊・22002号・4面・6月25日

山内祥史氏のご教示による。大阪本社版による。リードに「時局が悽愴を加へれば加へるほど、われら一億の銃後生活はおほらかな余裕と明るい平静さを示して行かねばならない」「そんな意味合ひで決戦生活の身辺から伸びやかな話題を拾つてみると……」という趣旨が記されている。同じ欄に高田保「文身」、尾崎一雄「路傍のヒマ」が掲載。パラルピ。*「この間の新聞にシラミの被害に関する記事が載つてゐた。シラミにくはれて発疹チフスに罹つたら日本人ははその死亡率が三人に二人の割合といふのである。そこで私はシラミも案外あなどられないと驚いて、それ以来は銭湯に行つても脱衣場の策を警戒するやうになつた。このごろシラミがうつるのは『銭湯の策から』といふのが定評となつてゐるからである。」「銭湯の策を、何とか消毒する方法はないものだらうかと考へてゐる。」

旅客と駅手＝文壇人の決戦輸送見たまゝの記＝

交通東亜・2巻7号（通巻21巻7号）・pp. 5～7・7月1日（6月25日）・東亜交通社・清水政親・23銭

「井伏鱒二著作年表稿（昭和10年）」（兵庫教育大学近代文学雑誌』3号・1992年1月）では未確認だったが、上記についての資料を林眞氏を通じて某氏より入手したので、再掲する。

昭和20年（1945）

ムカゴ－疎開者を迎へるの記－＝随筆＝

東京新聞朝刊・896号・2面・3月18日

山内祥史氏のご教示による。*「きのふの日曜日に、東京から友人が来るといふので〇〇駅まで迎へに出かけると、友人は来ないで友人のお父さんやお母さんやおばあさんが汽車からおりて来た。」友人本人は後日来るとのことで、友人家族の一行は「私」を残して行ってしまった。「暫時のあひだ私は降車口のところに立つてゐた。」避難者らしい人がところどころ見受けられたが、中に「焼けこげのしたねんねこ半纏を羽織つて赤ん坊を負ぶつてゐる婦人もあつた。」「一人の中学生に半纏の□[判読不可。付か?]け紐を工合よくしてもらひながら」、その婦人は、赤ん坊を負ぶって逃げる時に困った様子を語っていた。友人のために弁当を用意

していた「私」は、この婦人に弁当を譲ろうと思ったが、その弁当は友人の好物であるウルカばかりが入っている代物である。その婦人がウルカの弁当を見て困惑してはとと思って躊躇している間に、「モンペをはいた中年の男がやって来て」、袖の中からムカゴを少しずつ取り出してその婦人に与えたのであった。「私は『敗けた。』と思ひながら、その場を立ち去った。」